

黒羽芭蕉の館だより ②8

「船橋を隔て黒羽田町の図」

今回は、当館所蔵の「船橋を隔て黒羽田町の図」という絵画作品を紹介します。

本作品は紙本墨画で、掛軸に仕立てられています(本紙の寸法は縦98・0cm、横117・6cm)。黒羽向町の方から船橋や黒羽田町方面の風景を描いたもので、作者は不明ながら、幕末期ないし明治時代の作と考えられます。船橋は、那珂川に八隻程の船を浮かべ、川を横断する形でこれらを鉄鎖でつなぎ固定した上に、板を並べて橋としたものです。

本作品の近景には、黒羽河岸の内、下河岸の建物の一部や、荷を積んだ船・人物も描かれています。遠景に見える幟の描写と、本作品収納用木箱の墨書内容から、端午の節句(5月5日)の頃を描いたものであることがわかります。

現在、那珂川に架かって、黒羽田町と黒羽向町をつなぐ那珂橋があります。江戸時代後期までは橋がなく、船渡でした。そこに天保7年(1836)、黒羽向町の釜屋(後の船橋)久兵衛(日野商人)が試作したのが、船橋だったのです。



「船橋を隔て黒羽田町の図」

問

黒羽芭蕉の館
TEL (54) 4151

船橋は、その後の洪水による流失を経て、天保11年に再建され、明治32年(1899)まで使用されており、架橋場所は現在の那珂橋の約80m下流あたりでした。なお、明治32年、廃された船橋にかわって木橋の那珂橋が架けられ、それが同41年に架けかえられた後、昭和8年(1933)8月、現在の那珂橋(鉄橋)となったのです。今回紹介した作品は、8月1日より、当館大関記念室において、小泉斐筆「黒羽城鳥瞰図」「黒羽周辺景観図」と並べて展示しますので、ぜひご観覧ください。

彫刻

市内で作られた作品とその作者

周遊 ⑤8

このコーナーは、「那須野が原国際彫刻シンポジウム」で公開制作、設置された作品とその作者を連載で紹介いたします。

この作品は大田原市役所湯津上庁舎にある入口正面の階段を登ると見る事ができます。

作品は題名通り、とんぼの形をとっています。ただし、擬人化されています。6本の足は人の腕となり、1組は頭の上で何か丸いものを掲げています。1組は胸の前で人差し指を立ててバツの字に組んでいます。1組は腰のあたりで合掌しています。腹の先、擬人化されている足にあたる部分は、レンゲの花の様な形の球状のものから生えていて、ハネは昆虫らしい模様を表現するため



とんぼ
蜻蛉

しろくす 白水 ロコ 日本 2005年

に、丁寧にくり抜かれています。

作者は、「人間、動物、植物などを混同した状態」の作品を作ります。これは「常識の中にある矛盾や、傲慢で破滅的である人間に対しての疑問を提議する」という意味と、「姿形、習慣、価値観、人種など、様々な異なりある生物」が共存しているという意味を表現しています。

作者は愛知県生まれの白水ロコ氏。愛知県立芸術大学美術学部彫刻科卒業。2001年と2003年にハートフィールドギャラリーで個展を開き、2005年には第1回出雲・玉造アートフェスティバルに出展しました。



白水 ロコ 氏

設置場所案内図(★印)



問 文化振興課 湯 TEL (98) 3768